

<b>Title</b>	オクタヴィア・ヒルにおける思想的影響：ジョン・ラスキンをめぐって
<b>Author(s)</b>	木村, 美里
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.19-2 : 11-12
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=2310">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=2310</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# オクタヴィア・ヒルにおける思想的影響

## — ジョン・ラスキンをめぐって —

木村 美里

### はじめに

前回の研究ノート(19-1号)では、オクタヴィア・ヒル(1838-1912)に思想的影響を与えた人物の一人であるF. D. モーリス(1805-1872)と彼におけるヒルへの影響についての紹介を試みた。本稿では、特に自然美ないし芸術美への感性の側面でヒルに影響を与えたジョン・ラスキン(1819-1900)を挙げ、彼の思想とヒルに与えた影響について説く。

### 1. ジョン・ラスキンとその時代

F. D. モーリスが活躍した頃の時代背景と重なるが、産業革命が社会に大きな影響を与えており、この影響が人々の生活へも色濃く反映されていた。ラスキンと関係する自然における時代背景の一例を挙げるならば、囲い込みや鉄道建設による環境破壊が問題視されていた。しかしながら、営利目的の開発の波は強く、この深刻な危機に対する解決が求められていた。そしてワーズワス(1770-1850)をはじめとする自然崇拜あるいは神秘主義的自然観の思想がおこり、ラスキンはこの流れを受け継ぐ形で位置づけられる。つまり彼は「自然の美なくして人工の美科学の美のみに生きる近代英国国民性」(御木本1924:24)を嘆き、自然の美が人々にとっていかに大切なものであるかを主張したのである。

ラスキンは一方で画家ターナー(1775-1851)を高く評価および擁護し、芸術評論家として知られるが、他方では経済、思想あるいは哲学の分野等における幅広い活動を行った(松平2005:34)。ラスキンは女性共同ギルドを訪問した際に、そこで働いていたヒルと出会った。二人の関係はこの出会いに始まり、それ以後10年余り、ヒルはラスキンの学徒となって模写の指導を直接受けた。そして、ラスキンはヒルが社会改良家として

歩む重要な時期に、彼自身の著作、講演および直接の議論によってヒルに影響を与えた。

### 2. ジョン・ラスキンの思想

ラスキンは自然破壊がもたらす人間の精神への悪影響について警鐘を鳴らした人物である。彼は機械文明を最も嫌悪し、「この機械が発明されればされるほど産業は進歩発展するであろうが、その反面、人間の心は機械が使用されればされるほど失われて、希望や愛や生の讚美というものは、ともに望まれないことになる」(宇井1965:205)と考えた。すなわち、合理化が人間ないし生命の物象化(モノ化)を誘発し、この物象化によって人間の感情が希薄になることを意味する。そして、彼はすでにこの時代において、環境破壊によって人間が人間でなくなるという人間の尊厳が崩壊する危険性を示唆している。また、自然だけでなく、「芸術の目的は我々の国土を第一に清浄にし、我々の人々を美しくすることにある」(御木本1924:33)と述べ、同様に芸術が人々に与える影響をも重視している。

ラスキンは、人間が「自然風景の印象を感じないようにするのは、理性の鋭さではなく、人間愛の心の広さのためでもなく、むしろ下等な心配事、無益な不満、卑俗な享楽のためである」(ラスキン、内藤訳2002:264)と考えており、営利目的で自然を破壊する人間心理を理解していた。その上で彼は「自然の事物を喜ぶ感情が、最高の知的能力や最も純粋なモラルの原則を有する証拠だと解釈することはできないが、それらの感情が能力の通常の水準を超えた精神性と、人類にとって大いに貴重な感性を賦与された精神性を示す証拠であることは確かである」(ラスキン、内藤訳2002:263)と記している。すなわち彼は自然に対する感情に思想が関係している事実の重要性を説いている。したがって、ラスキンの自然観は自

然とその美しさに価値をおき、自然と人間との関係において自然が人間の精神に重要な影響を与えるという考えが基本となっている。特にラスキンは「ありのままの自然」を重視しており、建物における「修復」については、この「ありのままの自然」をユニークな形で象徴するような発想で自らの主張を展開している（稲垣 1984：98、99）。

### 3. オクタヴィア・ヒルに与えた影響

ヒルは生活状況が厳しい労働者が生活する住宅の改善、その周辺の空間の確保および美化そしてナショナル・トラストのような広大なオープン・スペースや歴史的建築物等を保護する団体の創設へと活動を発展させてゆく。彼女が住宅改良の活動を開始する際、住宅購入に必要な資金を提供した人物がラスキンである。したがって、ラスキンの援助なしではヒルの住宅改良における社会貢献の実績は存在しなかったのである（松平 2005：34）。また、彼の思想には「自然は神の賜物である。自然によって生まれた美は神より賜った力である」（御木本 1924：280）との考えが表れているといえる。ヒルが自然を重んじるとともに、自然を包括する空間を「癒しの贈り物（healing gift）」と主張する理由の一つには、ラスキンの考えが影響している。それは、すなわち文明社会における環境の重要性、特に自然と美に対する意識を重視し、尊重するという考え方である。先述の通り、ラスキンは機械による産業の発展が人間の感情を希薄にすると述べており、このことに対応して、自然は人間の精神を癒す力を備えていると考えられよう。ヒルとラスキンの関係はその後、方法論をめぐって疎遠になるが、ヒルはラスキンへの敬意を失うことはなく、生涯彼の思想を大切にした。

#### おわりに

オクタヴィア・ヒルはF. D. モーリスおよびラスキンからの思想的影響を受け、両者の思想の主要な点を吸収するとともに、自らの思想を進化さ

せ、独自性をもった思想を形成するに至った。彼女の思想は理想主義に陥らない理想実現を可能とする精神的基盤である。それゆえに、ヒルの精神は現代の環境問題において、現実的な解決を果たす役割として、現代的意義を見出せる。また、将来を担う人材育成にもつながるといえよう。筆者は今後の研究の展望として、ヒルと日本の道徳的に優れた人物との比較研究を考えており、この研究が環境保護を含む日本の将来への指針となるよう考察を試みる。

#### 参考文献

- 稲垣栄三『文化遺産をどう受け継ぐか』三省堂 1984年  
宇井丑之助『ジョン・ラスキンの人と思想』東峰書房 1965年  
松平千佳「オクタヴィア・ヒルとジョン・ラスキン」『キリスト教社会福祉学研究』日本キリスト教社会福祉学会、38：34-41 2005年  
御木本隆三『ラスキン研究——彼の美と徳と経済』厚生閣 1924年  
ジョン・ラスキン『風景の思想とモラル——近代画家論・風景編』内藤四朗 訳 2002年

（文責：きむら・みさと 聖学院大学総合研究所）